

<研究ノート>

テーマパーク化するエベレスト

大 野 哲 也

キーワード：エベレスト，冒険，テーマパーク

Mt. Everest, Adventure, Theme Park

冒険史としての人類史

700 万年まえにアフリカの大地溝帯で樹上生活していたサルのような一群が、肉食獣がウヨウヨしている地上に降りてすくっと立ち上がって直立二足歩行を始めた。これが人類史の始まりだ。

最高速度約 80 キロのライオンや 120 キロのチーターなど速く走ることが可能な四足歩行を採用しなかった最大の理由は、直立二足歩行の方がゆっくりとしか走れないが長い距離を移動することができるエネルギー効率の有利性にあると考えられている。広大な面積に散らばって存在する多種多様な食物を狩猟採集するためには、短距離型の俊足肉食獣に追いかけられるリスクを考えても、長距離型の方が合理的だと判断したのだろう。

この姿勢にはもう一つの利点があった。脳を巨大化できるのだ。四足歩行では脳は大きくできない。重量が細い首にかかってしまい、支えることができないからだ。だが直立していれば重さを脊椎、骨盤、両足というように体全体で支えることができる。そして実際、ヒトは脳を巨大化させて、今や宇

宇宙空間に行き生活できるほど科学技術を発展させた。これを成し遂げることができたのは姿勢という身体的特徴に負うところが大きい。

この省エネ歩行を最大限に活用して初期のヒトはアフリカを脱し全世界に拡散していく。ユーラシア大陸に入ると西と東に分かれ、西に進んだグループはヨーロッパに入り定住していった。東に進んだ群集は現在の東アジアに到達すると北東と南東に再分裂する。北東に歩を進めた一団はベーリング陸橋を渡りアメリカ大陸に上陸して南下、出アフリカから699万年かけて南米大陸最南端のウシュアイアに到達する。一方、南東に向かった集団はオーストラリアに上陸した。やがてその中から植物や木材で船をつくり大海原に乗り出していく者が出てくる。そして太平洋の島々に次々に上陸していった。日本からは約6000キロ、カリフォルニアからは4000キロ、オーストラリアからは7000キロという絶海の孤島ハワイに上陸したのは今から1500年ほど前だといわれている。こうして699万8500年かけたヒトの拡散プロジェクトは完遂した。

人類史は冒険の歴史であることがこれらの史実からも理解できるだろう。実際、人類は冒険心を原動力にして生物界の頂点に登り詰めたといっている。

たとえば大航海時代の1492年にスペインを出発して約2か月後にアメリカ大陸を発見したイタリア人冒険家クリストファー・コロンブス（1451-1506）は合計4回の航海を成功させる。彼の開拓したルートが端緒となって新旧大陸間でモノの移動が始まる。今では世界中で食されているトマト、ジャガイモ、トウモロコシ、トウガラシは南米原産である。一方旧大陸からはウマや病原菌などが新大陸に渡った。ウマによって新しい移動手段ができたことはプラスだったかもしれないが、病原菌への抵抗力や抗体がなかったことは凄惨ともいえる悲劇を現地にもたらした。

ともあれコロンブスがきっかけとなって新旧大陸が接続され地球規模で始まったモノの混淆をコロンブス交換という。

また1519年にポルトガルを出航して西へ向かった冒険家フェルディナンド・マゼラン（1480-1521）は、自身は1521年に現在のフィリピンで現地の者に殺害されてしまうが、船団は1522年にポルトガルに帰還して人類史上初めての世界一周航海に成功した。当時は地球球体説がすでに流布していたがこれを証明した者はいなかった。それをマゼラン船団が実証したのである。ただ厳密には世界一周航海に成功したことが球体の証明とはならない。円筒状や歪な球体状の可能性を排除できないからだ。とはいえこうした連続と続く冒険心が新しい生活を切りひらき、現代世界を作り上げてきた一要因であることは間違いない。

時代はくだり1900年ごろ、地球上にはヒトが行きたくてもいけない場所が3か所あった。南極点、北極点、エベレスト山頂（8848メートル）である。冒険界では3地点を3つの極、the three polesと呼ぶ。

これらの地点を巡って熾烈な一番乗りレースが勃発する。最初に陥落したのは北極点だった。アメリカのロバート・ピアリー（1856-1920）が1909年に到達する。その次は1911年に踏破された南極点だった。ピアリーとの北極点レースに敗北したノルウェーのロアル・アムンゼン（1872-1928）がイギリスのロバート・スコット（1868-1912）との激しい競争を繰り広げわずか1か月の差で栄冠を手にする。最後まで難攻不落だったのはエベレストだった。何度も失敗しながらも決して挑戦を諦めない理由を聞かれ「なぜならそこに山があるからだ」という名言を残して行方不明になったイギリスのジョージ・マロリー（1886-1924）が登頂に成功したのかどうかは登山界の最大の謎のままである。公式にはニュージーランドのエドモンド・ヒラリー（1919-2008）とネパールのテンジン・ノルゲイ（1914-1986）の二人がイギリス隊として1953年に頂点を極めた。

これによって社会的かつ政治的という意味で地球上から人跡未踏の地は消滅した。とはいえ人々が素朴に抱く冒険心が消え失せることはない。堀江謙一が小型ヨットで太平洋単独無寄港横断を成し遂げたのは1962年。三浦雄

一郎がエベレストの8000メートル地点、通称サウスコルからスキーで滑降したのは1970年。イタリア人のラインホルト・メスナーが8000メートル峰全14座の無酸素登頂に成功するのは1986年。ヒラリーとテンジンが最後の極点を制覇して以降の冒険は、単独、無寄港、無酸素、女性初、日本人初というようにすべてバリエーションである。冒険家は「人類史上初」という栄冠を常に欲しているが、孤高の三極地が征服されて以降、バリエーション以外に「初」がつかなくなってしまったからだ。だが「初」が有効でそこに価値があるならば、ジャーナリストの本多勝一がいうように「富士山をぐるぐるとラセン状に登るのも大バリエーション」（本多2012:95）だ。とはいえそれが「落ち穂拾い」（本多2012:94）かつ「バリエーション的企画」（本多2012:94）に過ぎないことは明白だ。つまりその冒険には社会的意味も価値もない。

冒険とはなにか

冒険を詳細に論じた本多はそれには重要な要素が二つあると指摘する（本多2012:66-67）。

一つは「生命の危険を冒す」とことと「主体性」であり「当人の意思で積極的に行うものでなければならない」と述べる。たとえばジェットコースターに乗ることは「スリルであり、危険であるかのように感じられるにすぎませんから、冒険ゴッコではあっても冒険ではない。」といい、「たとえば一枚の召集令状によって徴兵され、「天皇の命令によって」危険な戦場へ行くという場合、これは主体的行動とはいえませんから、いくら危険であっても冒険とは申せません。」という。そして「以上の二点を備えていさえすれば、冒険の条件としては必要かつ十分ではないか」と主張した。

これらに加えて「体制権力に反抗する」ことは冒険の中の冒険だと評する（本多2012:67-68）。「多くの場合、体制権力は武力と支配機構とマスコミ操作を独占していますから、大量殺人などはかんたんです。・・・冒険は危険

度の高いほど冒険的なのですから、この恐ろしい体制権力に反抗するなどということは、たいへんな冒険に違いありません。」

これら2プラス1が冒険の重要な構成要素であることはたしかだろう。ただしこれらからはみ出した冒険があることもわきまえておく必要がある。

たとえばジョン万次郎（1827-1898）の数奇な生き様がそれにあたる。高知県土佐清水市の貧しい漁師の家に生まれた彼は、1841年1月に仲間とともに漁に出るが漁船が航行不能になり遭難してしまう。数日間漂流したのちに伊豆諸島の無人島、鳥島に漂着。サバイバルしていた同年5月にアメリカの捕鯨船に偶然発見救助され、そのまま捕鯨船員になってアメリカへ向かった。帰港したマサチューセッツ州で下船し、当地で学校に通い勉学に励み、航海術、造船、測量などの知識と技術を習得する。その後、船員になって世界各地を訪れたり、ゴールドラッシュに沸くカリフォルニアで金鉱労働に就くなどして資金をつくり、1851年にまだ鎖国状態だった日本に帰国を果たす（上陸地は現在の沖縄県糸満市）。帰国後は、知識と教養、そして謙虚な人柄が高く評価されて教育や通訳などで活躍し、遣米使節団（1860）の一員にも抜擢された。1869（明治2）年に開成学校（現東京大学）の英語教授に任命され、翌年には晋仏戦争使節団の一員として欧州にも派遣された。動乱の幕末期から明治期にかけて、自身の数奇で冒険的な人生経験を最大限に活用して、新しい日本社会をつくるために尽力した重要人物の一人である。

またアポロ13号の奇跡の生還も同様だろう。1970年4月11日、人類3度目の月面着陸を目指してアメリカ・フロリダ州のケネディ宇宙センターから発射されたが、その二日後に酸素タンクが爆発して深刻な状況に陥ってしまう。とくに飲料水と電力の不足は危機的で無事の帰還は絶望的だった。だがジェームズ・ラヴェル、ジョン・スワイガート、フレッド・ヘイズの三飛行士と管制センターとの緊密な連携による問題への対処と、一旦逆方向である月へ向かって飛行してその背後を周回して地球に帰還するというドラスティックなルート決定が功を奏し誰の命も落とすことなく太平洋上に着水す

るというミラクルを果たした。

二つの事例はどちらも大冒険であったことには違いないが、ジョン万次郎の難破もアポロ13号の爆発も主体的にそのように行為したわけではない。さらにどちらも反体制というよりは、とくにアポロ13号は顕著だが、体制側の内部でおこなわれた意図せざる冒険だといえる。したがって本多が示した冒険の2プラス1がいつでも当てはまるというわけではない。

一方、作家の角幡唯介は冒険のキーワードとして「反体制」^{システム}を挙げる（角幡2012:282-284）。彼が示す反システムとは現在のネパール側からのエベレスト登山に顕著に表れている。いまエベレストは登頂ツアーが催行されていて、誰でもいける場所になっている。登山シーズン前にガイドたちによってルート工作がおこなわれ、危険な場所にはザイル（ロープ）が張り巡らされる。途中のキャンプは食事も含めてガイドとシェルパが準備する。チャレンジャーは、そのロープをつたって歩いていけば安全に登頂できるようになっている。いまや高山病に対する予防と治療のデータも豊富なのでスケジュール管理は緻密の極みだ。天気予報も正確性が増している。通信機器の進化も目覚ましい。また標高5364mのエベレストベースキャンプ（EBC）にはヘリコプターの離着陸場があり、万が一の場合はそこから首都のカトマンズまでダイレクトに飛ぶ。これらトータルとして、準備段階から下山まで完全にマニュアル化されている。「冒険」という言葉から多くの人が想起する「未知なる世界への挑戦」というファクターは皆無だ。とはいえ8848mはやはり過酷で、滑落して死者も出れば高山病にも罹る。不意な雪崩も起こるし、遭難することもある。角幡はこうした登山を指して、本多の『無謀でない冒険』とは形容矛盾であって、冒険は本来『無謀』なものである」という言葉を引用しつつ、「危険だと思う人はいても無謀だと思わないだろう。エベレスト登山が「無謀な冒険」ではなくなったのは、それが体制化^{システム}、マニュアル化し、時代の常識の枠内に吸収されたからである。」と述べる。つまり、こうしたマニュアル化したものの外部にある行為こそが冒険ゴッコで

はない冒険だというのである。

たしかにシステム化されていない冒険的行為は理想としてはそうだろう。だがシステム化の外に出るのは、現代では相当困難である。たとえば83歳になった堀江は2022年、最初の太平洋横断から60年目に当たるこの年にサンフランシスコから和歌山県までヨットで太平洋を単独無寄港で横断した。1962年の逆ルートだ。年齢的なことも含めて、これが冒険であることは多くのひとが肯首するだろう。実際にオフィシャルサイトには大々的に「世界最高齢での単独無寄港太平洋横断を達成！！」（サントリーマーメイドHP）と謳っている。

とはいえ航海中にテレビ番組に生出演したり、日本の支援者から毎日正確な天気予報が情報提供されたり、最新の素材でつくられた沈まない工夫の数々が施された船体—62年のヨットはベニア板製—を準備したり、GPSなどの機器を含めた設備面の発展など、もはやシステムだらけだと言って良いほどの内容になっている。というよりも、冒険とは、マゼランにせよコロンブスにせよ体制下でシステムを最大限に活用して実践されるものなのである。

なにも堀江を批判しているわけではない。堀江はもとより、現在の冒険で最新の機器や装備を使わない者はいない。誰もが最新最良道具を駆使して冒険している。それは当然のことだ。もしもこの時代にジョン万次郎と同じ装備で冒険目的に漂流したとしたら、もはや滑稽だ。したがって本多のいう「反体制」も角幡のいう「反体制」^{システム}も、現代世界の冒険では理想化しているロマンティックな幻想だといえるだろう。

以前筆者は、冒険はパフォーマー・オーディエンス関係の中で成立する行為であると論じたことがある（大野 2015:53-69）。たしかにアムンゼンと南極点争奪レースを繰り広げて敗れた末に悲劇的な結末を迎えたスコット隊に対するイギリス国民の悲嘆。日本冒険界の第一人者であった植村直己が北米大陸最高峰デナリ（6190 m）の厳冬期単独登頂に成功した直後に行方不明になった時のマスメディアの過熱ぶり。前述した堀江の太平洋単独無寄港横

断中のテレビ出演などはまさに冒険が「みる・みられる関係」の中で成立していることを証明している。挑戦者はみられているからこそ冒険に一層の気合が入るのであり、観客はみることによって熱狂したり挑戦することの大切さを学んだりするのである。

とはいえこれもすべての冒険に当てはまる要素ではない。たとえば植村の冒険人生のスタートとなったアメリカの農場での不法移民としての労働、筏によるアマゾン川下り、ヨーロッパアルプス最高峰モンブラン（4807 m）登頂などの世界放浪は誰に知られることもなくおこなわれたものであり、当時の彼には、それらを文化資本に変えるというような上昇志向の野望は一切なかった。同様のことは1962年の堀江の太平洋単独無寄港横断にも当てはまる。日本社会がまだ一般人の海外旅行を厳しく制限して事実上の海外旅行禁止政策をとっていた当時、パスポートも金も持たず、夜陰に紛れて違法に出国した彼がヨットと共にサンフランシスコに突然現れたとき、日本のマスメディアはその冒険的価値などには目もくれず「逮捕すべき」と大合唱をした。当の堀江も「帰国後は牢屋に入れられるんじゃないか」と一抹の不安を抱いたこともあった。

現在冒険は非常に難しい立場に立たされている。ロマンチズムを掻き立てる人跡未踏の地はもはやなく、どんなに命懸けのチャレンジをしたところで誰かの模倣にすぎなくなってしまった。反体制も反システムも成立しない。みる・みられる関係も同様だ。二番煎じの茶番ではオーディエンスは熱狂できない。繰り返しになるが、だからこそ皆がバリエーションに走るのである。まだ誰もやっていないニッチを探して右往左往しているのだ。そう考えれば富士山グルグル登山もあながちバカにならない。冒険が拡散しているともいえる。

このように多くの人が素朴に持っている冒険心は決して消失しない。ではこの持て余された冒険心はいかに救済されるのか。

冒険受難時代における冒険

2023年5月7日、ネパールの首都カトマンズのトリブバン空港から15人程度が乗れる小型機でエベレスト街道の起点となる標高2860mのルクラに飛んだ。2週間の予定でEBCのプレ調査に向かう。ルクラからEBCに至るルートはネパールのトレッキングの中で最も人気があるもので、この日も飛行機は満席だった。フライト時間は約30分、たったそれだけで別世界に行ける。

今回はエベレストの商業化の実態を経験するという目的があったので、カトマンズにオフィスがあるエベレスト登頂ツアーも手がけるアジアン・トレッキングを利用した。15日間の日程で航空運賃、宿泊、食事、入山料、ガイド、ポーターなどすべて込みで1805米ドル。同行したカウンターパートのアムリット・バジュリャチャヤはネパール人なので168500ネパール・ルピー（1NPR≒1.12円）だった。アムリットの方が安いのは、ネパール人は入山料などが不要だからだ。

筆者は25年前にも同じルートを歩いたことがあるのだが、当時と現在ではまったく様変わりしていてかつての面影は一切なかった。たとえば25年前のルクラ空港（標高2840m）は未舗装でただの広場と呼べるよう代物だったと記憶しているが、今では立派なアスファルトが敷かれ建物も大きくなっている。山の斜面を平らにしただけの原野然としていた周囲にはホテル、土産屋、レストランなどが林立して立派な町になっていた。

初日は天候が悪く10時に離陸するはずの飛行機が遅れに遅れ15時発となってしまった。そのため当初の予定を変更してルクラから約7kmの標高2610mのパクディンまで歩く。日が暮れるのが早いので休憩もほどほどに3時間弱で到着する。

8日は8時にパクディンを出発して6.4キロの道のりを4時間で歩き標高2835mのモンジョに到着。体力的には全く問題ないが高所順応をしながら



なので無闇に歩を進めることはない。

9日は8時に出発して12時に最初の目的地、標高3440mのナムチェバザールに到着。ここはエベレストトレッキングの中心地だ。歩行距離は8.1キロだった（写真：ナムチェバザール）。

10日は8時に出発して12時に標高3780mのクムジュンに到着。この日は7.3キロを歩く。

11日は7時45分に宿を出て9.1キロ歩き、12時45分に標高3860mのテンボチュに到着。

12日は7時45分に出発して10.9キロ歩き、14時45分に標高4242mのペリチュに到着。

13日はペリチュに滞在して、高所順応のために標高5010mのチュクン湖までトレッキングをする。6時45分に出発して16時に帰着。歩行距離は18.5キロだった。ただ帰路、稜線を降っているときにアムリットが高山病と疲労から転倒して両膝と右肩をしたたか打ちつけて痛めてしまう。稜線は幅が2mほどあったのでことなきを得たが、両側は相当な角度で落ち込んでいて仮に滑落していたら命を落としていたかもしれない。

当日の夜にガイドと相談して翌日ペリチュでガイドを雇いアムリットをナムチェバザールまで下ろすことにする。そこまでいけばヘリコプターをチャーターできるので状況次第ではすぐにカトマンズの病院に連れて行ける。

反対に無理をして上に向かってもEBCは標高5364mあるから症状は絶対に改善しない。むしろ悪化することが必定だ。

14日の朝、アムリットの膝は大きく腫れ上がっていた。馬を雇ってそれに乗って下山することも提案したが本人が頑なに「ナムチェまでは絶対に歩く」と言い張るので予定どおりガイドにアムリットの荷物を持ってもらうことにする。もしも大丈夫なら筆者が下山するまでナムチェでのんびり静養し

ていて欲しいと伝える。

その後、7時50分に出発して11時50分に標高4930mのロブチェに到着。この日は9.7キロ歩いた。

筆者の調子が良いのでガイドが「アムリットのこともあるのでできるだけ早く下山した方が良い。あなたの体力ならここからEBCを往復できるだろう。明日1日でやらないか」と提案を受ける。当初のスケジュールではロブチェから標高5364mのEBCを往復して1泊、翌日に標高5140mのゴラクシェプまで行って1泊、その次の日にもう一つの目的地であるカラパタール（標高5550m）に登頂したあとペリチェまで降るという予定だった。それを1日でやっってしまうというのが彼の提案だ。

ちなみに高山病は体質に負うところが大きい。高所が得意か苦手かは体力、年齢、性別などとは関係がないといわれている。筆者はこれまでアルゼンチンのアコンカグア（6960m）、タンザニアのキリマンジャロ（5895m）、そしてデナリに登頂した経験があるが、高山病に罹ったことはない。幸運なことに生まれつき高所に強い体質なのだろう。ガイドも筆者もアムリットを一刻も早くカトマンズまで下ろした方が良いと意見が一致していたので提案を受け入れた。

15日は5時50分に宿を出発してゴラクシェプ経由でカラパタールに登頂。その後、通常のトレッキングルートから大きく外れて山の背後へ回り込むようにトラバースしながら降下していった。足場が非常に不安定で、大きな岩



でもグラグラしている。高低差があって斜面が切り立っている。足を滑らせて滑落したら途中で止まることはない。もちろん生きては帰れない。緊張感はマックスで「こういうスリルは久しぶりだな」とテンションが上がった（写真：中央奥がエベレスト）。

ガイドの計算どおり昼前にEBCに到着しアジア・トレッキングが催行している登頂ツアー（中国隊、アタックは15名）の本部へいく。それは天井が2m超、直径4mほどの円形の巨大なドームで一面人工芝が敷かれていた。中央に巨大なデスクと50インチほどのモニターがあり、Wi-Fi経由でYouTubeの映像がBGMがわりに流れていた。中国隊サポーターの女性がマシンで淹れてくれたホットコーヒーを飲みながら寛いでいると、「昼ごはんは何が食べたいですか」と聞かれた。彼女はすでに1か月間ここで生活しているという。「コックがいるので食べたいものはなんでも準備できますよ」と微笑んだ。「あなたが普段食べているものが食べたい」というと、「ほとんど中華ですよ」といって外の厨房テントで作業をしているアジア・トレッキングお抱えのネパール人シェフ三人にあれこれ指示を出した。その後、我々はドームの横にある食堂テントに移動した。まもなく昼食が出てきた。野菜炒めや肉炒めなど大皿で5品、それに炊き立てのご飯とスープ。とてもではないが彼女とガイドと筆者では食べきれないほどの量だ。前日にガイドがEBCのスタッフに事前連絡していたので豪華にもてなしてくれたのだろうが、カップ麺や携行食なんかを食べているのかなというこちらの予想は大きく覆された（写真：EBC）。



食事の後はEBCを歩き回った。アジア・トレッキングはこれら以外にもシャワーテント、トイレテント、そして隊員が寝るテントなどを密集するように建っている。ガイドは、これらはすべてヘリコプターではなく人力で運んでくるといった。驚きつつ人工芝や巨大モニターや机も人力なのかと聞くと、もちろんと言って笑った。

中国隊以外にも多くのテントが建っている。広範囲にわたって 100 以上はあるのではないだろうか。登山者とは別に、トレッカーたちがEBCを一望できるビューポイントにかたまって記念撮影をしている。

EBCで2時間ほど過ごしたあとロブチェに戻るべく出発した。きついアップダウンはあるものの全体的には下りだからペースは早い。一気にゴラクシェプまで歩いて小休止してそこからまたノンストップでロブチェまで歩く。帰着は 16 時、歩行距離は 21.2 kmだった。我々の今日 1 日の行程はよほど珍しいことだったのだろう、彼は宿にいた知り合いの誰彼に「今日、ここからカラパタールとEBCを往復してきた」と話していた。友人たちは私に目を丸くしつつ微笑みながら「グッドジョブ!」と言ってくれた。

ロブチェで一泊して翌 16 日、朝 7 時に出発して標高 3930 mのパンボチェまで一気に降る。着は 13 時。距離は 15.4 キロ。途中面白いことがあった。私たちのかなり前方に 40 代くらいの男女が歩いていた。女性の消耗が激しいのだろうか、かなりのスローペースだった。追い抜かすときにガイドが「大丈夫ですか。何か手伝いましょうか」と声をかけた。そうすると男性が「大丈夫だ、ありがとう」と応えた。それがきっかけで休憩がてら立ち止まって会話が始まった。彼らはロシアから来ていた。ガイドがびっくりして「あなたたちの国は今大変なことになっているね。こんなところにきて大丈夫なの?」と聞いた。すると男性は「ウクライナのパイロットはとても優秀だね。彼らはすごいよ」と、まるで自分とは無関係の出来事のような陽気な口調で言いにつこり笑った。

17 日は 7 時 30 分に出発してナムチェまで降りる。15.3 キロの道のりで到着は 11 時 30 分。ホテルではアムリットがカトマンズに戻ることなく我々の帰りを待っていてくれた。本人はだいぶ良くなったと言っているが、痛めた足をひきずって歩くので相当痛いのだろう。

18 日は 7 時 45 分に出発して 19.5 キロ先のルクラまで歩く。アムリットの膝のことを考慮して途中のモンジョかパクディンで宿泊する予定だった

が、アムリットが「できるだけ早くカトマンズに帰りたいから今日はルクラまで歩く」と言って譲らない。15時30分に無事に到着。しかしこの日のカトマンズ行きの際はすでに出発したあとだった。

ルクラとエベレストベースキャンプの間を往復したわけだが、このコースは山が急峻で傾斜の強いアップダウンを繰り返す。街道は多くのトレッカーで賑わっていたが疲労困憊して歩くのを諦めて下山する人や、もう歩くことができずヘリコプターをチャーターしてカトマンズに戻る人を何度か見かけた。街道沿いは宿泊施設や食堂が立ち並んでいるのでサバイバル感はないが、高所という過酷な環境は、トレッカーにかなりの冒険感を与えているのだと思った。

その感覚を強化しているのが、ルート上にある数か所のチェックポイントに貼り出されている行方不明トレッカーの情報提供を呼びかけるポスターだ。一人や二人ではなく相当数に上っている。道に迷う可能性は低いと思うので、日が暮れて足元がよく見えない中を歩きつづけていて、あるいは雨中の行動で滑ってしまい高所から転落したのかもしれない。「たぶんトレッキングの経験が浅い人なのだろうが、行方不明者は後をたたない」とガイドが言っていた。

19日は朝から濃霧と雨。これでは飛行機は来ない。全便欠航となった。町の散策だけなので歩行距離は2.2キロだけだった。

20日は一転して快晴だった。朝早く空港に行く多くの人でごった返していたが、ガイドの腕の見せどころだったようで、9時のフライトを確保できた。11時にはカトマンズのホテルに帰着していた。その後、アムリットは病院に行ってレントゲンなどの診察を受けた。腫れ上がっているものの骨折を免れたのは幸いだった。

エベレスト登山という冒険の内実

ナムチェまで降りてきてガイドが教えてくれたところによると、EBCか

ら電話があって15人の中国隊は15日に全員がアタックして11名が登頂、4名が疲労で撤退という結果だったそうだ。登頂率は73%だから、アジアントレッキングは相当優秀な会社だと言える。ちなみにEBCまで下山したら全員がヘリコプターでカトマンズに一直線だそうだ。「歩いてルクラまで行く人はいないのか」とガイドに聞くと「みんなここから1秒でも早く脱出したいと思っているから、そんなことを考える人は一人もいないよ」と言って笑った。いまでは、中国隊に限らず帰路はEBCからヘリコプターが多数派だそうだ。

現在、EBCはディズニーランド、ユニバーサルスタジオと並んで世界三大テーマパークと称されることもある場所となっている。

エベレストトレッキングも同様で、ルクラからEBCまでどこかの宿泊施設に泊まろうが、ホットシャワーとWi-Fi完備、部屋はツインルームで掃除が行き届いている。併設されているレストランではピザやスパゲティなどのイタリアン、中華、チベット料理、ネパール料理などをはじめチョコレートケーキやアップルパイなどのデザートも多種多様でカトマンズにいるのと同大差ない。コンビニと言って良いほどのクオリティを持つ売店もあってお菓子、ジュース、アルコールなどなんでもある。

トレッキングが嫌い、あるいはそんな時間がない人なのだろうか、カトマンズからヘリをチャーターしてEBCにやってきて写真を撮ったりして15分程度滞在したのちカトマンズに戻っていく観光客も見た。「あれはそういうツアーだ」とガイドが教えてくれた。たとえトレッキングに挑戦したとしてもEBCまでは相当きつい道程だ。前述したが、途中で歩くのに疲れてリタイアする人は多い。ただなかにはもう歩けないけれども、どうしても上には行きたいという人もいる。そのような人はウマをチャーターすれば良い。ロブチェまでの道中、そのような人を時々見かけたので「そういうものなのか」とは思っていたが、カラパタルの頂上を目指して急勾配のがれ場でウマに跨るインドの高齢女性をみたときには心底驚いた。ウマで登頂できるの

かどうかはわからないが、ともあれ現在のエベレストはなんでもありのワンダーランド状態なのである。

25年前のエベレストはこうではなかった。個室などはなくドミトリーの雑魚寝が当たり前。もちろんシャワーもWi-Fiもなかった。食堂ではおばさんが、ウシの一種であるヤクの糞をお好み焼きのような形状で乾燥させたものを火力燃料にして料理をつくってくれた。

25年ぶりに訪れた場所は、どんな記憶とも一致しない別世界に変わっていた。

エベレスト登山に話を戻すと、1992年から登頂ツアーを催行している老舗の一つニュージーランドのアドベンチャー・コンサルタント（AC）はすでに2024年の参加者を募集している。ツアー期間はカトマンズ発着で計63日間、料金は73000米ドルだ。ACだけでなく日本の会社もある。リューセキ・エクスペディションは、カトマンズ発着で計62日間、66000米ドルだ。ガイドに聞くと「自分はエベレスト登山のガイドはやらないので正確な値段はわからないけれど、アジア・トレッキングはそれよりは安いよ」と言っていた。

このようにエベレストの登頂は相当敷居が下がっているのだが、その一方で、2023年の春シーズンは17名もの死者も出した「記録的」「史上最悪レベル」ともいえる年だった。難易度が下がっているはずなのになぜなのか。一つの理由は、難易度が下がっているからこそ、登山技術が低い者でも挑戦できる／挑戦するからだろう。いくら「歩いていれば頂上に着く」と揶揄されようが8848mという高さは過酷である。高山病、風邪、胃腸病など想定外の体調不良が起こる。天気が急変して、人間など一瞬で吹き飛ばすほどの烈風が吹き荒れることも稀ではない。

こうしたリスクを背負いつつ高い料金を払って頂上を目指す、いわば究極の遊びといって良い。この遊びは主体性を伴った生命をかける危険性が高い行為、すなわち冒険だ。ツアーの安全度は格段に上がり、しかも年々上がり

続けている。快適度も同様だ。だがそれにもかかわらず死者は出る。とはいえ死者が出ることによってそのようなリスクを冒した自分自身の冒険的価値は上昇するのである。したがって自分以外であれば死者は出るほうが良い。登頂した自らの文化資本が強化されるからだ。

現代の冒険に社会的な意味はない。どこまでいっても私事に閉塞している。だがそれでも構わない。そもそも大半の人は現代の冒険に社会的意味など求めておらず、自分自身が満足すればそれでいいからだ。

こうしたトータルな作用によってエベレストのテーマパーク化は日々更新されその価値と意味を高めているのである。

付記

本研究は、JSPS科研 22K12628 「「冒険ツーリズム」の誕生に関する観光社会学的研究」の研究成果の一部である。

参考文献

- 大野哲也, 2015, 「冒険人類学序説」『桐蔭論叢』32号, pp. 53-69。
- 角幡唯介, 2012, 「「反体制^{システム}」としての冒険」『日本人の冒険と「創造的な登山」』山と溪谷社電子版, pp. 280-286。
- 本多勝一, 2012, 「最近の探検記や冒険記の傾向」『日本人の冒険と「創造的な登山」』山と溪谷社電子版, pp. 94-96。
- 本多勝一, 2012, 「ニセモノの探検や冒険を排す」『日本人の冒険と「創造的な登山」』山と溪谷社電子版, pp. 66-77。
- サントリーマーメイドHP, <https://www.suntorymermaid.com/sm3/>